九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

目加田さくを著『大鏡論 漢文芸作歌圏における政治批判の系譜』

田坂，憲二
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/12079

出版情報：語文研究. 48, pp.66-69, 1979-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

目加田さくを著『大鏡論』

漢文芸作家圏における政治批判の系譜

田坂憲二

この度、目加田さくを氏の『大鏡論』が上梓された。本書は、その副題にも示されている如く、「漢文芸作家圏における政治批判の系譜」の中に大鏡を位置づけ、歴史的にその系譜を辿るとともに、大鏡を政治批判の面から論じたものである。豊富な資料を駆使した堅実な論の展開は著者の学風であるが、本書でもその特質は遺憾なく発揮されており、おのづから重厚且つ説得力のある論となっている。以下、順を追って紹介させていただく。

第一章　古代中国における史家の政治批判と諷諭・諷諫詩　では古代の日本人知識階層の教養を形成していた典籍を逐次取り上げ、その具体相を明らかにされる。第一節では、詩経三百余篇の序を取り上げ、「詩の主題の説明が、すぐに政治批判となるところに、中国の詩、文芸の特殊性がある」ことを見る。猶、この個所における詩経序の全文引用を始めとして、以下夥しい量の漢籍が引かれるが、それは、当時の知識階級が真摯に学習・受容した事実の重みを知るために追体験を必要とするという、著者の見識によるものである。第二節では、楚辞が「屈原とその門流の生、讒奸に陥られた憂国憂憤の思を詠じた詩」として受容されていたことを示し、更には、史記の屈原・賈誼伝によって、国家の危機を感じ取り、慨歎・悲哭した人物の生涯に共感したであろうという事実を指摘される。第三節では、記載事件の善悪成敗が国君や臣子の鑑戒として重んぜられたという春秋をとりあげ、大鏡の過去をくもりなく正確に映し出すという鏡の意識が、その系統を引くものであることを明らかにされる。又、大鏡に散見する「世の人」「何某」曰く、という形は、春秋左氏伝を筆頭とする中国古典の影響によるものとされる。第四節では、史記・漢書・後漢書を取り上げ、「東洋において、歴史をかくという事は、政治批判を行う殆んど唯一の場」であったことを指摘し、「歴史事実の明白な提示によって」歴史を批判させるのがこれら史書の行き方であった、と結論づけられる。

第二章　漢文芸作家圏と政治批判及び批評文芸　では、第一章で取り上げた諸書物を学んだ人々によって、政治批判・行政批判の文

芸がどのように行われていったかを歴史的に跡付けられる。第一節では、七世紀に於ける政治批判として、伊吉連博得書に言及される。第二節では、八世紀の政治批判文芸を検討される。先ず、懐風藻の作者評伝において、大友皇子を「皇太子」「淡海帝之長子」と記す方法は、弘文帝として即位した事実を暗示しており、天武朝に対する一種の政治批判であるとされる。又、釈智蔵の評伝においては、宗教界の堕落が智蔵の伝記を語るという形で提示されていることを指摘される。更に、長屋王の宴に出席した十七人の作家の詩を採択するという懐風藻の編纂方針そのものが、長屋王を抹殺した政界に対する批判意識を有していると捉えられる。以下、山上憶良の万葉歌、日本書紀に於ける蘇我一族の記録、続日本紀の薨卒伝等を逐次検討し、それらに同様の批判意識が見出されることを説かれる。第三節では、九・十世紀に於ける政治批判と評語の定着について述べられる。文徳実録に見られる、時人・国人・民という民衆の声、論者という時人を導く者の設定、等に批評様式の定着が見られることを指摘される。又、橘広相・都良香の諷諭・諷諫の文学、三善清行における政治指向性の強さにも言及される。第四節では、帝記・丞相日記を取り上げて検討を加えられる。具体的には、宇多・醍醐・村上御記、貞信公記、御堂関白記である。例えば、宇多天皇御記には、基経批判という形での政治批判が、又、貞信公記には、下僚の懈怠非難という形の政治批判が見られるとされる。第五節では、小右記に於ける政治批判について述べられる。先ず、御堂関白記に私的記事が多いのに対し、小右記の大部分が公的記事で占められているのは、後世の規範とならんとする意識の反映であり、事実を記述し、歴史的批判を仰がんとする姿勢の現われであるとされる。例えば、長和五年正月の宣命紛出事件、寛仁元年八月の蝗害、同三年の刀伊賊入寇事件等に見られる両者の記述の態度の相違などが、そのことを明白に示しているとされる。又、小右記に於いては、天皇・上皇批判を始めとして、道長一門、中関白一門、及びそれらに追蹤する公卿達への批判が随所に見出され、貪吏酷吏列伝とも言うべき、前大弐惟憲・丹波守資業に関する記述などは「春秋三史に培われた漢文芸作家実資の史眼のなせるわざ」とされるのである。

以上のように、七世紀から十一世紀に至る漢文芸作家圏の人々の手になる政治批判の文芸を歴史的に辿った上で、本論とも言うべき、

第三章　大鏡の検討に移るのである。

第一節　帝紀の検討　では、中国に於ける史書の帝紀の要である帝の政治生活が大鏡では殆んど語られず、母后の出自・生誕の場所が重視されることを指摘し、これが、帝が藤氏の孫・藤氏の傀儡であることを強烈に印象づけるための手段であると結論づけられる。

第二節　他氏排除　では、恒貞親王、惟喬親王、菅原道真、敦康親王、小一条院等に関する記述を中心として述べられる。惟喬・惟仁親王の立坊争いに関しては、文徳・清和・陽成紀の三代に亘って伊勢物語を引用することに注目され、惟喬親王事件を当局の目を憚ってみずから語らず、伊勢物語に語らせることによって、朧化されきったもののあはれの雰囲気の中に藤氏批判をこめる方法であるとされる。菅原道真左遷事件に関しては、藤原時平を徹底的に卑小な人物として創造していることを指摘し、時平のみを攻撃することによって忠平の流れを汲む藤原北家主流の目をかわしつつ、その実藤氏批判をやりおおせていると論述される。猶、時平の三代実録・延喜格撰輯の功績についてふれないのは、何を採択するかによって「歴

史の事実」ではなく、「歴史の真実」を語ろうとする姿勢であるとされる。定子所生の敦康親王が彰子腹の敦成・敦良親王におさえられ立坊できなかったことに関しては、後一条院帝紀、師尹伝（二回）道隆伝（定子・伊周・隆家の記述箇所の三回）と繰り返し言及されることを取り上げ「分散、繰り返し、追加方式」の妙とされる。即ち、直截に記述することによる筆禍の危険性を分散記述で防ぐとともに、繰り返し述べることによって読者へ確実な印象を与えるべく構成されている、と結論づけられている。小一条院退位事件は大鏡全篇中の白眉であるが、著者もこの個所を詳しく検討されている。先ず、小一条院退位事件形成に関して、採択されなかった素材として「小一条院の母宣耀殿女御娍子にかかわる淑景舎女御原子毒殺事件」「資質なき皇子の形成と、敦明親王の異常性」という二点を取り上げる。前者に於いては、毒殺事件に触れることにより小一条院退位事件が淑景舎女御の怨念のなせるわざという印象を読者に与える危険性を避け「純粋に、道長の無類に巧妙なる策謀のみ」によって退位させられたことを認識させようとする姿勢であると指摘される。後者に於いては、小一条院の異常性――栄花物語・小右記では屢々述べられている――にふれることによって、東宮追い落しが国家的見地から肯定される危険性を避け、ひたすら「道長一門による謀略と東宮退位事件の悲劇性を強調しようと意図したもの」とされる。次に、小一条院事件全体の構成としては、師尹伝による「本形成」、兼通伝・道兼伝による「脇形成」、源高明事件に関連しての「別形成」の、「分散・追加方式」の巧妙なものになっていると指摘される。本形成に於いては、世継自身に当局の忌諱を慮って表面上は道長方に有利な発言を一旦させておき、侍の反論を呼ぶという複雑な構成をとり、主謀者を道長と匂わせておき、兼隆の謀略（道長の意を受けた）であることを「脇形成ですっぱぬき」別形成で再度ふれることにより小一条院事件を読者の脳裡に深く刻みつける方法をとっていると論述される。第三節　列伝の検討　では、冬嗣・良房以下道長に至るまでの二十人の伝を順次俎上に載せる。基経伝に於いては阿衡事件を取り扱っていないことに注目され、基経門流を賛美する姿勢を一旦とり、次の時平伝において時平の横暴を徹底的に叩き、ひいては藤氏糾弾を成し遂げるための配慮である、とされる。同様のことは、次の忠平伝における絶対的な礼賛の姿勢にもあてはめられる。頼忠伝に於いては、外戚ならざる関白の権力の弱さを述べることによって、逆説的に外戚関白の横暴を暗示する方法を指摘される。伊尹伝に於いては、伊尹一門の価値は「政権の角度から計られるべきものではなく、芸術的生、にあり、と賛歎する」姿勢があることに着目され、伊尹の歌人としての一面、早逝の貴公子義孝、能書家行成、更には花山院の風流等を「美的伊尹一門の生」として大鏡が形成していることを指摘される。猶、この項に於いて、早逝の系譜・道心の系譜として、義孝・高光・道信をあげ、それらに関する史料をほぼ網羅しておられる。道隆伝では、道長との政治的抗争に敗れた一門の姿を描いているが、道隆自身は政治臭のない愛すべき人間像として造形され、伊尹も政治的力量は劣るものの「才ある高二位の血統、美貌の一門」として造形されていることを指摘される。隆家に関しては、道長に次ぐ多くの逸話が語られていることから、作者が深い関心を寄せていたことを指摘されるとともに、刀伊入寇を撃退したことが正当に評価されなかったことへの政治批判を見るべきだと説かれる。以下、道長伝・藤氏物語についてふれられ、

これら個々の列伝の検討から、大鏡に於いては「早逝・出家・風流――芸術的生の門流」「怨念家の門流」という、二つの敗者の系譜が見出されることを述べられる。

第四章　大鏡の様式　は、前三章で得られた政治批判の文芸の流れを汲む大鏡の特色を簡潔に纏めるものである。第一節では、大鏡が、仮名書・私撰・紀伝体の史書という体裁を取っていることについて、当局の批判に対し「仮作物語と称して逃げることができ」「個人で書きたい事実を巧みに」述べ、編年体に比し「反復とりあげ・補足追加又は違った角度から観察したところ」を述べることが可能な方法であったとされる。更には「地の文世継・反論侍・相槌繁樹・世の人」の巧みな構造を指摘されるとともに、資料の個々が作者によって選択されるという「意識的な大鏡の歴史離れが存在する」とも説かれる。第二節では、大鏡が聞書という「文責在他者のたてまえ」をとっていることにふれられる。又、大鏡中にしばしば見られる詩歌物語は、一連の政治批判の一種の隠れ蓑的役割を果していると述べられ、中でも菅家の詩歌が群を抜いているのは、読者を菅家への同情へと誘い込む効果があるとされる。更に、屢々描かれる出家物語・早逝物語・芸術譚は、「政権から外れた風流者の門流」にも価値を見出そうとする大鏡の姿勢であると位置づけられる。第三節では、大鏡の「鏡の意識」としての面を纏められる。即ち、帝批判を筆頭に様々な廷臣批判の存在を指摘されるが、一方、道長に対する過剰なまでの賛美は、これら政治批判を行ったことに対する「大鏡作者の風当りよけである」と捉えられる。猶、基経伝において高陽院の豪邸を造る頼通への批判が潜められていることも指摘される。更に、これら政治批判をなす主体が「在野の古老」であること、又、世人の考え・世論を重んじることは、中国伝来のものであることを指摘される。この第四章は、本書の結論部分とも言うべきものであるが、それは前三章で丹念に積み重ねられた考証に裏打ちされており、読む者をして納得させずにはおかない。

以上、甚だ粗雑ではあるが、本書の全体を鳥瞰してみた。著者は、先年『源氏物語論』『枕草子論』の二大著を公けにされたばかりであるが、引き続き本書のような質量ともに充実した書を刊行されたのである。その精力的な執筆活動には、只々瞠目するばかりであるが、「後記」によれば、更に氏は、大鏡の他の（政治批判以外の）諸方面を続編であとづける予定とのことである。著者の〝大鏡論〟がその全貌をあらわす日を待ち遠しく思う。ともあれ、九五〇頁にも及ぶ大著の真価を限られた紙幅の中でどれほど伝え得たか、はなはだ気がかりである。又、浅学故の誤読や読みの至らぬ点もあろう。氏の御寛恕をお願いする次第である。

（昭和五十四年四月、笠間書院刊、九四七頁、二〇〇〇〇円）